横浜現代史人物伝②
写真家・前川謙三

一、前川淨二家（前川写真館）資料

すでに『市史通信』第六号（二〇〇九年一一月）で紹介したように、横浜市史資料室は二〇〇九（平成二一）年に神奈川区の前川写真館から関東大震災関係の写真帳の寄贈を受けた。その後も同館三代目の前川淨二氏のご好意により、約四〇〇〇枚のガラス乾板をはじめ各種資料のご寄贈を頂いた。当資料室では、鋭意、整理作業を進めると同時に、整理の済んだ資料を横浜開港資料館の企画展「下岡蓮杖開業一五〇周年記念　フォトスタジオの聖地・横浜」（二〇一二年二月一日～四月一五日）に出陳するなど、一般公開にむけた準備を進めている。

さて、寄贈された資料群の中で最も重要な位置を占めるのは、何と言っても初代・前川謙三に関する書類や写真類である。明治期にアメリカに留学し、帰国後は六桜社（現・コニカミノルタ）や東京美術学校（現・東京芸術大学）、小西六写真専門学校（現・東京工芸大学）などで後進の指導にあたった謙三は、横浜の近現代史の一端を語るだけでなく、日本の写真史を考察する上でも重要な人物であろう。

【写真①】修業時代の前川謙三
丸木写真館撮影　前川淨二家資料

かつて筆者は「前川謙三―「関東大震災」を記録した写真家の生涯」（季刊『横濱』第二九号、二〇一〇年七月）において謙三の人物像を紹介したが、その後の調査で新たな発見や事実誤認も判明した。そこで今回は、前川淨二家資料の一部を紹介しつつ、改めて「前川謙三」の生涯を追ってみたい。

二、上京と留学

前川淨二家資料には、前川謙三の経歴を語る資料として、①「履歴書」と②「此の道親子三代」（下書き・清書）の二種類がある。前者は謙三本人の記したもので、自らの誕生から写真館開業までの経緯が記されている。一方、後者は謙三の長男である順三（前川写真館二代目）が記した手記で、自身の経験を踏まえながら、父親の生涯を語っている。本稿では、この二つの資料を中心に謙三の生涯を再現していきたい。

一八七三（明治六）年一一月一三日、前川謙三は福井県大野郡鹿谷村大字矢戸口（現・勝山市鹿谷町矢戸口）の医師・前川九兵衛の次男として生れた。同村鹿渓小学校を卒業した謙三は、一八八八（明治二一）年七月に東京府芝区新桜田町の丸木写真館に入門し、写真師の道を歩むようになる。

【写真②】丸木写真館時代の前川謙三
前川淨二家資料

館主の丸木利陽は謙三と同じく福井県出身で、二見朝陽・朝隈に学んだ後、新橋に豪壮な写真館を構えた。また、後年、帝室技芸員や東京写真業組合の組合長を務めるなど、小川一真とともに、写真界の重鎮となった。謙三が丸木に入門した理由は定かではないが、地縁に基づくものが大きかったと考えられる。実際、丸木一門の多くは福井県人で占められていた（光山香至著・発行『丸木利陽伝』、一九七七年）。

その後、丸木のもとで写真術の基礎を学んだ謙三は五年間の契約期間を終えた後も技師として丸木写真館に残り、写真術の腕を磨いていった。それと同時に一八九五（明治二八）年から築地明石町のサンマース英語学校で語学を学び、三年後の一八九八（明治三一）年にアメリカに渡って写真術の研究を行った。前掲『丸木利陽伝』に依れば、謙三の留学の背景には、最新のレンブラント採光法を取り入れようとする丸木の意図があったようである。

渡米した謙三は最初にサンフランシスコの写真館で学んだ後、一九〇一（明治三四）年にセントルイス市のギュイリン写真専門学校に入学、そこで最新式の採光法や印画法を習得した。さらに卒業後は北米各都市の写真館で実地研究を重ねた後、一九〇二（明治三五）年に帰国することになった。

帰国後、謙三は丸木写真館の館主代理に就任し、アメリカで学んだ技術を写真館の運営に活かしていく。特に謙三の持ち帰った採光法は丸木式採光法として次第に広まっていった。

三、六桜社時代の前川謙三

一九〇五（明治三八）年八月、前川謙三は海軍水路大監・荒畑岩次郎の次女静子と結婚する。前川淨二家資料のなかには、静子の記した日記（「明治三十八年文月　おぼえがき」）があり、短い期間であるが新婚時の日常生活や人的繋がりが窺える。

一九〇六（明治三九）年、謙三は丸木写真館を辞し、翌年から東京府淀橋町大字角筈の六桜社写真部（小西六兵衛店、後のコニカ）に技師として勤務する。この時期、謙三は写真術の研究に専念しつつ、全国を巡りながら写真術の講習会等を開いていった。その活動の一端は「六桜社の一日」（『写真月報』第一三巻第六号、一九〇八年六月）などに見られる。

また、写真に関する各種イベントの審査員としても活躍しており、例えば、一九〇八年三月に行われた時事新報社

【写真③】下岡蓮杖翁肖像
前川淨二家資料

主催の美人写真審査会では、洋画家の岡田三郎助や彫刻家の高村光雲、人類学者の坪井正五郎とともに、最終審査員の一人に名を連ねている（『時事新報』一九〇八年二月二四日、同三月一日）。写真師としての謙三の眼は周囲からも高く評価されていたのだろう。

さらに同時期、謙三は小西六系の『写真月報』に自身の作品や論文を多く寄せており、写真技術の普及や啓蒙活動に努めていた。例えば、【写真③】の前川謙三撮影「下岡蓮杖翁肖像」は『写真月報』第一三巻第一号（一九〇八年一月）に掲載されたものである。

かつて筆者はこの写真の撮影時期を前川写真館の開業後と考えていたが、雑誌掲載の時期からその直前に撮影されたと考えられる。謙三はこの写真を大変気に入っていたようで、謙三の弟子である山根哲氏の話に依れば、【写真④】のように、前川写真館の一階に大きく掲げていたという。

以上のように、丸木写真館を巣立った謙三は、六桜社時代に活発な活動を展開しており、人脈の幅を拡げていった。結果的に、六桜社時代の経験が後の教育者としての謙三の立場を築いていくことになった。

【写真④】昭和期の前川写真館の内部
山根哲家資料

四、前川写真館の開業

六桜社時代、前川謙三は写真館営業に関する自らの考えを『写真月報』で度々述べており、「写真家が写真術に熱心でなくてはならぬのは勿論ですが、営業して居る以上は華客に向て忠実でなくては困る」と、接客の重要性を訴えている（「営業雑感」、『写真月報』第一一巻第一号、一九〇六年一月）。こうした謙三の考えを体現したのが横浜の「前川写真館」であった。

一九〇九（明治四二）年八月、六桜社を退社した謙三は、同年一〇月一八日に横浜市山下町三七番（グランドホテル裏）に前川写真館を開業した。

これについて同月の『写真月報』第一四巻第一〇号は、前川写真館の開業を告げる記事を掲載し、「前川氏は二十有餘年間内地及海外に於て研究を積み人物写真撮影に就きては蘊蓄深く、写真界の暁将として声明あるの人、氏は叮嚀と迅速を旨とし特殊の技能を奮ひて専心人物写真の撮影に従事しつゝあれば氏の成功は期すべきなり」と、謙三の新たな門出を後押しした。

しかし、開業三日目にして謙三は大きな災難に見舞われる。一〇月二一日午前四時頃、山下町六九番地の工場から火災が発生し、隣接する山下町三六番地から三八番地に燃え移った（『横浜貿易新報』一九〇九年一〇月二二日）。これによって前川写真館も失われたが、謙三は六桜社の支援を受けつつ、翌一九一〇（明治四三）年四月に新たな写真館を弁天通三丁目に開いた。

謙三が横浜を開業の地に選んだ理由は定かではないが、得意の英語を全面に掲げて営業を展開した点から、開港場としての性格や居留外国人の存在が大きかったと推察できる。自らに加え、妻静子も英語に堪能だったので外国人の客も多かったようである。

【写真⑤】弁天通三丁目の前川写真館　1910年代　横浜開港資料館所蔵絵葉書

そうした前川写真館の様子は、『写真月報』第一九巻三号（一九一四年三月）掲載の小野泰正「横浜市に前川先生を訪ふ記」からも窺える。同記事は全国を巡ろうとする青年写真師の記録で、「間口四間あり二階建の西洋館にて店舗にカビネ判やら八ツ切四ツ切の写真十数葉を陳列し、いずれも見事な御写真のみであった」と、前川写真館の外観を記している。さらに内部の様子を見ると、「撮影客の半数は外国人との事とて、装飾の御写真其他見本の御写真中其約四分通りは、外国人の写真であった」とあり、外国人の撮影に重きを置いていた点がわかる。

一九一八（大正七）年に横浜通信社の刊行した『横浜社会辞彙』は謙三を「君は金港一流の写真師」と評し、「其撮影法及び撮影場は米国流の最新式にて従来の旧式と異なり特得の技能は既に人の知る所なるも君は益々技術を精練して毫も怠らす（中略）益々其業務を拡張し門前市を為し名声金港に洽し」と繁盛する様子を記している。前川写真館は順調に発展しつつ、横浜の中に根を下ろしていった。

五、教育者としての前川謙三

前川写真館には、館主である前川謙三をサポートする写真技師（番頭）

【写真⑥】前川写真館を訪れる外国人
大正末期　前川写真館前　前川淨二家資料

三も手記に「門生も、年と共に変遷はあったが、略、全国から集まり、厳しく仕付けられ、鍛えられて、大部分の人が、所を得、写真館主として一本立ちして行った」と記している。

一方、一九一五（大正四）年二月に東京美術学校が臨時写真科を設置すると、謙三は同校に寄付金を送っただけでなく、修正実習の講師として招かれた。その時は体調を崩したため、僅か一年で職を辞したが、古巣の小西六が一九二三（大正一二）年四月に小西六写真専門学校を開くと、自らもそれに参画し、修正術の担当講師として教壇に立った。同校の開校を告げる『読売新聞』の記事は、「教授は前川謙三、加藤精一、秋山轍輔等の有名な写真技師が当たるべく」と、謙三の名を報じている（同年二月一二日）。

謙三は自分の写真館と写真専門学校で多くの写真家を育成し、その教え子のほか、常時数名の門下生が住み込みで働いており、謙三の厳しい指導を受けていた。順は全国の写真館で活躍していった。

六、関東大震災と前川写真館

一九二三（大正一二）年九月一日の関東大震災によって横浜は壊滅的な打撃を受け、前川写真館も焼失した。そうしたなか、写真師の秋山轍輔は『写真月報』第二八巻第一一号において、「前川謙三氏は一家無事に本牧に避難されたことは、全滅の横浜では幸福なことであると御悦びを申す外はないのである」と、罹災した前川謙三の様子を伝えている。写真館を失ったものの、謙三の一家は難を逃れた。

その後、横浜市の要請を受けた謙三は、門下生とともに罹災地の撮影を行ったほか、前川写真館は一二月に営業を再開、弁天通三丁目にバラック小屋の店舗を建てた。一九二四（大正一三）年一月七日の『横浜貿易新報』には、「復興の芽生　営業開始　前川写真館」の広告が確認できる。さらに震災一周年には、弁天通の追悼会で自らが撮影した震災写真を公開し、多くの人を集めた（『横浜毎朝新報』一九二四年八月三〇日）。謙三は大きな苦難を乗り越え、写真館の再建を図っていったのである。

【写真⑦】前川謙三を囲む丸木同窓会と親光会のメンバー
昭和戦前期　前川写真館前　前川淨二家資料

謙三は写真館の経営だけでなく、市内同業者の技術向上にも努め、一九二七（昭和二）年一二月に「親光会」という写真材料の研究会を結成した。確認できる限り、この研究には、岡本三朗、福田福太郎、安藤不二夫、石井周三、夏目厚、加藤藤太郎、志村永太郎、松島友三郎などの市内写真館の主たちが加わっていた。同会は定期的な研究会だけでなく、旅行や忘年会などを行い、相互の親睦を深めていた。

また、謙三と丸木利陽同門生との結束も固く、井口義雄や米村清治など丸木の弟子たちも前川写真館を訪ね、横浜の写真師たちと交流していった。謙三は全国の写真師と横浜の写真師を繋ぐ役割も果たしたのである。

さらに写真芸術の普及をめざす横浜写友会（主宰・安藤不二夫）にも謙三は特別会員として加わり、写真芸術を志す人々の指導にあたった。このように関東大震災後の横浜の写真界において謙三は重要な位置を占めていた。

一九四一（昭和一六）年一月、写真専門学校を卒業した順三が写真館の運営に加わるなど、前川写真館の経営は安定していたが、順三は僅か六ヶ月で陸軍に徴集される。その後、謙三も戦況の悪化とともに長野へ疎開することになった。一方、前川写真館は一九四五（昭和二〇）年五月二九日の横浜大空襲によって再び焼失してしまう。

敗戦後、高射砲部隊にいた順三は無事に復員し、謙三はそれを大いに喜んだ。一九四五（昭和二〇）年末、再び親子で写真館をやろうと横浜に戻るが、老年の謙三は風邪を拗らせてしまい、翌年三月一日に療養先の伊東温泉で生涯を閉じることになった。享年73。

【写真8】晩年の前川謙三と家族・門下生（第14回前川同門会にて）
1943年8月25日　前川写真館スタジオ　前川淨二家資料

【参考文献】
小西六写真工業株式会社社史編纂室『写真とともに百年』（小西六写真工業株式会社）

（吉田律人）